教職課程センター紀要　第 8 号　53-64 ページ、2023 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.8 53-64, 2023

論文

『源氏物語』の授業 1

―人物像を読み創作する―

Tale of Genji Class 1: Create after Reading the Person's Image

古屋　明子

Akiko FURUYA

Key words:正編，光源氏，女君・男君，セリフや現代語訳の創作
Main part,Hikaru Genji,ladies and a man,Creation of lines and modern language translations

１．はじめに

(1)今人物像を読む意義

『源氏物語』の作中人物研究については、『源氏物語』の核心（作者の創造性や精神の中核）に迫るための予備的作業の一つ[(1)]であり、その後、方法論、主題（作品統一性をもたらす契機となる問題・モチーフ）論、表現論との各関わりにおいて捉えられてきた[(2)]。人物論研究の意義は主題や構造と緊密な関わりを持った姿を知ることである[(3)]とされ、これらは『源氏物語』という作品を明らかにするための一方法としての人物論であり、作中人物研究は現代の源氏研究において過去のものになりつつある。

しかし、現代の文学部の学生・院生の関心は作中人物論にあることが多く、本来文学への憧憬や関心は物語の主人公の生き方･人生観への共感や反発から出発し､徐々に関心は拡大、派生しつつ、また作中人物そのものに回帰するのが《文学》の核心であるので、人物論そのものに意義がある[(4)]、とも言われる。また、人物と表現（言説や視点、語り等）に着目した新しい人物論[(4)]も提唱されている。

『源氏物語』の各登場人物の人生や生き方を読むことは、現代の我々の人生や生き方についても深く考える契機となる。豊かな感受性を持ちつつ自身の進路について真剣に考える大学生の時期に､高校時代に学んだ桐壺巻･若紫巻だけでなく､『源氏物語』正編を読み通し各登場人物像の読解を通して、学生が古典に親しみ自己のより良い生き方を探ることは大いに意義があると考える。

(2)国語科における創作の意義

高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）国語科の言語活動例においても、言語文化では和歌や俳句の書き換えや外国語訳（2B(2)ｴ）、古典探究では和歌や誹諧、漢詩、文語訳（2A(2)ｳ）、アンソロジーや随筆（2A(2)ｷ）の各創作が挙げられている。また、文学国語においても小説や詩歌（2A(2)ｱ）、翻案作品（2A(2)ｳ）、共同の作品（2A(2)ｴ）、脚本や絵本など他の形式の作品への書き換え（2B(2)ｳ）、アンソロジー（2B(2)ｵ）の各創作が挙げられている。

それぞれの科目において指導する資質・能力では、言語文化では「作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと」（2B(1)ｵ）、古典探究では「古典の作品や文章について、内容や解釈を自分の知見と結び付け、考えを広げたり深めたりすること」（2A(1)ｵ）、「古典や作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること」（2A(1)ｶ）、「古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること」（2A(1)ｸ）、文学国語では「文章の構成や展開、表現の仕方などについて、伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること」（2A(1)ｴ）、「作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めること」（2B(1)ｶ）、「設定した題材に関連する複数の作品などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めること」（2B(1)ｷ）が挙げられている。

これらの資質・能力とそれらを育てるための言語活動例を見てみると、「我が国の言語文化の担い手」として、

作品の内容や解釈を踏まえて人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を広げ、自身のものの見方、感じ方、考え方を深めること、深めた結果である創作を自身で工夫して相手に伝わりやすい文章にすることが求められていることが分かる。

これらを踏まえて、大学生に人物像を基に様々な創作活動を通して古典に親しみながら、協働学習を通してものの見方・感じ方・考え方を広げ深め古典における理解力・表現力を伸ばしていくことは、「我が国の言語文化の担い手」の資質・能力を定着させる上で大いに意義があると考える。

２.『源氏物語』の授業１の概要

(1)目　的　古典の多様な指導方法を知る。

(2)期　間　2022 年 9 月～2023 年 1 月

(3)科目名　教職実践演習（中高）

(4)学　年　4 年生　2 クラス（22 名、20 名）

(5)教　材　『源氏物語　第一～第七巻』玉上琢彌訳注付現代語訳　角川ソフィア文庫

(6)内　容（全 10 時間）

＊残り 5 時間は外部講師による。

＊授業の前半は学生による教育実習報告で、後半が『源氏物語』の授業。

①桐壺巻「桐壺更衣」

［方法］弘徽殿女御「かどかどし」・楊貴妃「うるはし」との各比較、桐壺更衣の和歌

《協働学習話題》もっと生きたいという歌だが、更衣は何が悲しいのか。

【最終個人課題】桐壺更衣の人物像とそのように考える理由

②帚木巻・空蝉巻「空蝉」

［方法］「中納言兼衛門守娘」（父に早逝されて零落した姫君）「つれなき人」「憂き身の程」、空蝉の和歌（身の憂さ、数ならぬ、名のうさ、消ゆる帚木）

《協働学習話題》空蝉の人物像がそのように造型されている理由は何か。

【最終個人課題】空蝉の人物像とそう考える理由

③若紫巻「藤壺」「光源氏」

［方法］藤壺、光源氏の各セリフ（各人物像が表れるように工夫する）

《協働学習話題》セリフと工夫を発表し合う。

【最終個人課題】他の人の発表の長所（工夫）は何か。

④葵巻「六条御息所」

［方法］生霊になった理由

《協働学習話題》六条御息所が生霊になった理由は何か。

【最終個人課題】六条御息所の人物像

⑤賢木巻「六条御息所」or「藤壺」or「朧月夜」と「光源氏」

［方法］グループ（3 人）で役割（語り手・女君・光源氏）分担をして「ざっくり賢木巻」（現代語訳）を作成する。

《協働学習話題》語り手：地の文のざっくり現代語訳

女君：和歌のざっくり現代語訳

光源氏：和歌のざっくり現代語訳

【最終個人課題】それぞれのざっくり現代語訳のつながりの確認

⑥須磨巻・明石巻・澪標巻「明石の君」

［方法］「明石の君」と「紫の上」との比較（花・名詞や形容詞・楽器）

《協働学習話題》明石の君の人物像

【最終個人課題】そのように考える理由・感想

⑦若菜上巻「紫の上」と「光源氏」

［方法］「紫の上」と「女三の宮」との比較（形容詞・形容動詞）

《協働学習話題》紫の上と光源氏の各心情

【最終個人課題】そのように考える理由・感想

⑧若菜下巻「紫の上」「光源氏」「女三の宮」「柏木」

［方法］各登場人物の心情が表れた古文や現代語訳に着目する。

《協働学習話題》「紫の上」「光源氏」「女三の宮」「柏木」の各心情

【最終個人課題】各心情について自分の意見

⑨柏木巻「柏木」「光源氏」

［方法］古語に着目して「柏木」「光源氏」の各心情を考える。

《協働学習話題》古語に表れた「柏木」「光源氏」の各心情

【最終個人課題】各心情について自分の意見

⑩御法巻「紫の上」「光源氏」

［方法］古語に着目して「紫の上」の心情を考える。「紫の上」の辞世の歌と「光源氏」の返歌の各心情を自分の言葉に置き換える。「紫の上」と「光源氏」各人物像を考える。

《協働学習話題》「紫の上」と「光源氏」各人物像とそのように考える理由

【最終個人課題】各人物像とそのように考える理由について自分の意見

３．授業で工夫した点

(1)予習→授業→復習（桐壺巻）

【予習】本文（桐壺巻前半）を読み、桐壺更衣の人物像とそのように考える理由をワークシートに書き提出。

【復習】桐壺更衣の人物像がそのように造型されている理由をワークシートに書き提出。

(2)古文を読みやすくするために

現代語訳（玉上琢彌氏訳）の活用。

(3)人物像を考えやすくするために

人物像に関する多様な先行研究の提示。

(4)授業を分かりやすくするために

授業のポイントをまとめた PPT の提示。

授業の流れにそったワークシートの作成と活用。

(5)自身の考えを広げ深めるために

課題の難易度に伴い、指導形態を変化させた。

易（例）古語の意味：個人で調べる。

やや難（例）和歌の解釈：グループ（3～4 人）で話し合う。

難（例）人物像とそう考える理由：再び個人で考える。

(6)発表の工夫

グループの話し合い結果を用紙（板磁石付き A3 版）にマジックで書かせて黒板に貼らせ、口答で発表させて理解を共有させる。

＊電子黒板とタブレットを使っての発表も、より速くより簡単にできる。

(7)創作の工夫

①取り組みやすいように、現代語でのびのびと表現させる。

②内容は、人物像とそう考える理由、各人物のセリフ、生霊になった理由、ざっくり現代語訳、古語に着目した心情等。

③共同で一つの作品を仕上げる場合もある。（例）ざっくり現代語訳

(8)取り上げた人物

人物は、光源氏と彼に関わる女君、男君。

①桐壺更衣、②空蝉、③藤壺と光源氏、④六条御息所、⑤六条御息所 or 藤壺 or 朧月夜と光源氏、⑥明石の君、⑦紫の上と光源氏、⑧紫の上・光源氏・女三の宮・柏木、⑨柏木・光源氏、⑩紫の上と光源氏

(9)取り上げた巻

光源氏の一生である正編において、上記の人物に関わる巻を取り上げた。

①桐壺巻、②帚木巻・空蝉巻、③若紫巻、④葵巻、⑤賢木巻、⑥須磨巻・明石巻・澪標巻、⑦若菜上巻、⑧若菜下巻、⑨柏木巻、⑩御法巻

４．学生の作品

☆「桐壺更衣」の人物像とそのように考える理由

〇心優しい悲劇の女性、不憫な人（27 名）

【理由】・気を遣えて優しい更衣は、プレッシャーに感じることや苦しいことを帝には言わず、実家に帰る時も帝に引き止められ、感情がぐちゃぐちゃになり追い込まれ、死にゆくしかなかったと思う。今も昔も嫉妬という気持ちは変わらず悲劇に遭う人はいる。だからこそ、辛いのに頑張っている人が一番かっこいいと思った。・和歌の中に別れを惜しむ気持ち、生きたい気持ちを詠んでいる。

〇大納言家再興悲願の女性（1 名）

【理由】周りからの嫌がらせや嫉妬によって心身共にストレスがたまっていただろう時に、光源氏を出産するほど強い心の持ち主であると思うから。夫と離れることも流産することもなく、愛に生きる強い人だと思う。

☆「空蝉」の人物像とそのように考える理由

〇自分の身分というものを意識しており、自分の身の上の不幸を嘆いている。源氏への想いをもちながら、身分の差から源氏を受け入れることができない女性。

【理由】・源氏との会話の中で自分の身分について語る部分が多く、今の身分になる前ならばという話も出てきていることから。・自分の人生に関する残念な気持ちを根底にもっており、華やかな源氏と自分の今を考えてしまうような性格に思えたから。

〇身分意識が強いために、自分の置かれた立場や状況に悩む人物。特別器量が良いわけではないが、教養がある。

【理由】・自分の立場をわきまえ、源氏を拒むことができ、自分を客観視できるから。また、それにより、知性を感じられる。自分の身分を卑下するのは、帚木に喩えていることから分かる。・源氏が好きになった女性という点から、風情ある女性を想像した。また、源氏の思いに応えないところから、身分を気にする思慮深さやそこに対する意志の強さがあると考えた。

☆「藤壺」のセリフ・「光源氏」のセリフ

「藤壺」なぜ源氏のことを受け入れてしまったのでしょう。帝の妻として先帝の皇女として、このようなことは決して許されません。私はこの先どうすれば良いのでしょうか。

「光源氏」一度通った仲であるのに、なぜこちらを向いてくれないのですか、藤壺様！その懐妊したというのは私の子ではないのでしょうか？もしそうであれば、父の顔に泥を塗ってしまったことになる。
「藤壺」私たちの関係が世に知られるのが恐い。何よりも桐壺帝を裏切ってしまったことが辛いのです。ああ、私はどうしたらよいのでしょう。
「光源氏」ずっとお慕いしておりました。私の母によく似ていて魅力的な女性だ。実際に母の顔は覚えていないのに、なぜこんなにもひかれてしまうのだろう。この気持ちを抑えることができません。
☆他の人のセリフの長所（工夫）
・具体的に何に思い悩んでいるか（密通をしていること、桐壺帝を裏切ることになるという罪の意識等）を言っていたところ。
・現代の言葉を用いてより身近に感じるセリフを選んでいた。
・細かい分析あっての言葉選び。ドラマの１シーンになりそう。
・お互いの身分のことを踏まえて考えてみると、藤壺の焦りや嫌な気持ちが伝わってきた。
・「自分は一度きりにしておきたい」というセリフは和歌からも読み取れる点なので参考になった。罪を重ねたくない気持ちが伝わってくる。
・源氏の魅力に抗えない姿、胸の内をよく表している。
・源氏がピュアなように感じた。

☆「六条御息所」が生霊になった理由
・源氏に対しての執着、そして、葵の上への嫉妬。
・年下の男（源氏）に遊ばれプライド（自尊心）が傷ついたのに加え、源氏のことを本当に好きだったから。
・自分の社会的地位や葵の上と光源氏との関係性への嫉妬。
・光源氏のことがやはり好きで、棄てられたらどうしようと思い悩んだ。その不満をさらけ出したいものの、泣き言を言うのは「美しくない」と思っていたので言えなかった。自分の中で嫉妬心を理性で隠そうとしていたが限界を超えてしまったため。
・心のどこかで自分は光源氏の中の一番でいたいという思いが簡単に裏切られてしまったため、自分の中の光源氏への気持ちと光源氏の御息所への気持ちの差に耐えられなくなってしまったから。
・一番は相手のことが好きすぎて想い続ける時間が長かったため。また、その人の一番に自分がなりたいという独占欲も大きい。
・自分の思うような関係が源氏と築けていなかったことに対する悔しさから。
・車争いで六条御息所がひどい侮辱を受けた恨みが深かったため。
・源氏との仲が離れていく中で車争いが起こり、葵の上の懐妊を知り、無意識に葵の上がいなくなればよいと思ってしまったから。
・光源氏のことを強く思っているが、自分が年上であることや源氏と葵の上の関係のことで深く思い詰めてしまい、純粋な気持ちでいられなくなってしまったから。
・体面や内面、複雑に入り組んだ精神性をもつ多面的で多層的なキャラクターが六条御息所であり、物の怪となる要因の一つである。
・正妻の葵の上とは正反対で、人間の根底にある執念深さを生霊として表現している。
・光源氏のせい。身分相応の対応をせず軽んじたから。

☆ざっくり賢木巻―六条御息所と光源氏―
　光源氏は広大な野原にお入りになってから、わきの花が枯れていく様子や風音から、もののあわれだと感じていた。それに加えて弦楽器の音色が聞こえてくるのはよりいっそう風流な雰囲気を増している。
（光源氏）あなたを思う気持ちは変わらず来てしまいました。なのになぜ嬉しそうじゃないのですか。
（六条御息所）目印の杉もないのに、どう思って、あなたを招こうと思ったのでしょうか。
（光源氏）あなたのような方なら神様の近くの神聖な場所にいると思い、あなたを思い出す賢木の香りが懐かしく思ってきました。
　周りの様子はあったものの、光源氏は御簾に入り敷居に寄りかかっていた。
　訪れる人々を去りにくそうにさせるこの庭はまさに恋の舞台だ。次第に明ける空もそのためにあるかのようだ。
（光源氏）今日の暁の別れは、いつにも増して悲しく、今までないほどに切ないですね。
　六条御息所の手を取りためらう光源氏の優しさやこの２人の雰囲気もあって、歌も上手く詠めないのでしょうか。
（六条御息所）秋に別れるというだけでも悲しいのに、松虫の声がもっと悲しくさせるので、鳴いたりし

ないでおくれ、野辺の松虫よ。
　光源氏はどうしようもないまま、去って行った。残された六条御息所は光源氏がいたあたりをぼーっと見つめていた。
　光源氏は暗くなってから出てきた。歩いているととても切なく思って、
（光源氏）今日私と決別して、伊勢で私を思い涙を流し後悔しませんか。
（六条御息所）私が泣くか泣かないか、伊勢での生活を誰が考えてくれるでしょう…。あなたの思いは伊勢には及ばないでしょう…。
　言葉は少ないがとても深みがある。光源氏は様々な思いのまま独り言を言う。
（光源氏）御息所は行ってしまわれた。どうか彼女に逢えない分、逢坂山はよく見ておいておくれ。
　光源氏は誰のもとへも行かず、しかし寂しそうにぼんやりとして一日を過ごしていた。
☆ざっくり賢木巻―朧月夜と光源氏―
　煩わしい事は増えていくが、朧月夜と心が通じているおかげで無理をするが長くは逢えない。行事に出席した際に、帝の隙を伺って光源氏はこっそりと逢いに行くのだった。
（朧月夜）私の心から求めた事なのに、涙で袖が濡れてしまう。「明く」という声にも「飽く」と言われているような気がする。
（光源氏）この私に嘆きながら一生を過ごせと言うのでしょうか。世は明けても胸があけて晴れることはなく、朧月夜に飽きることはない。
　そうしていく内に光源氏は、お便りを出すこともなくなっていった。
（朧月夜）木枯が吹くたびにお便りはないものかと待っている間に、待ち遠しく思う気持ちも過去のものとなってしましました。
（光源氏）あなたにお逢いできずに恋い偲んで流れる涙によって降るこの涙雨を、秋の時雨だと思って見ているのでしょうか。
〈弘徽殿太后の気持ち〉光源氏と朧月夜の軽率な行動に怒りを隠せない。光源氏を失脚させ都から追い出したい。

☆「明石の君」の人物像とそのように考える理由
〇身分をわきまえた控えめな人物だが、気が利き才能のある女性。とても周りが見えて、行き届かぬことは少しもない人柄であったのに、態度がすごく良くて、非のうちどころのない思慮の備わった人物。
【理由】「思ひ比ぶるに、さすがなる身のほどなり」「女房の用意さへ、いみじくととのへなし給へり」
〇身のほどをわきまえていて、常に紫の上のことを立てるなど、徹底している。また、自分の娘を紫の上に預ける時も苦しい気持ちを抑え、それを承認するという、筋の通った優しい心の持ち主。
【理由】・光源氏が言葉をかけても固い決心である様子から。また、澪標巻において自身のことを情けなく、取るに足りない分際と発見したことから。・心情を語る部分で「取るに足りない身」、「わが身のほど」などの表現が用いられているから。
〇すごく強い女性。
【理由】・自身の思う所はたくさんあったと考えられるが、それでも自分の身分をわきまえて低姿勢でいるから。・自分が明石の君だったら娘と会うことができないのは辛くて耐えられないのに、それができるから。・子どもを渡す選択肢を取るというのは、本当に子どもを大切に思っているからこそなのではないかと思ったから。・今までの女性たちは源氏に惹かれるのが早かったが、明石の君はひと味違ったから。・本人は源氏と自身の身分差に悩みながらも家の繁栄を成し遂げているので、聡明な女性であることが伺える。・身分制社会の陰の側面の一つを担う人物であるように思えるから。・最初は明石の入道の復権のために利用されるだけの女性なのかと思っていたが、自分の考えをもった強い人だと分かったから。
〇謙虚で奥ゆかしい女性。気品や美しさもある。
【理由】源氏に口説かれ続けても１年間丁寧に断り続ける程、自分の立場をわきまえていたため。・大人っぽさや上品さ、光源氏と少し距離を取る姿勢が六条御息所に似ているから。・歌なども大人で上品な感じが出ていて、また、自分の感情を好き勝手に出さないから。
〇琵琶の名手であり、巧みな技術や身のこなしを身に付けている人。
【理由】「らうらうじ」。源氏と結ばれたことを喜んではいるが、身分が低いからと色々我慢したり、娘との生活を諦めたりしているから。

☆「紫の上」の心情とそのように考える理由
〇なぜ今になって正妻を迎えたのか。でも我がままを言えない。謙遜しないと。（無理をしている）光源氏の他に頼る人がいないからどうにもならない。自分ではダメだったのか。（不安・不満）

【理由】・全体的に無理をしている様子が伝わる場面が多いから。今になってどうしてこんな気持ちにならなければいけないのかと思うが、我がままは言えない、我慢しようという意志が伝わったから。・女楽の場面が終了した後、紫の上は病気にかかってしまうため、それまでかなり気を張っていたのだろうなと考えたから。・女三の宮との結婚をきっかけに源氏が離れてしまう。それに対する不満と二人の未来に対する不安があるように感じたから。

〇源氏の立場を理解しているからこそ、源氏を女三の宮の所へ通わせないといけないと思いつつも、やはり寂しさがある。源氏の妻であり、自分の地位は不動であると安心していたことをうかつだったと反省するが、周りにはそのような様子は見せずおっとりしている。

【理由】念入りに香をたきしめながらも、物思いに沈む様子。源氏がなかなか出かけないのを「私が困る」と発言。

〇女三の宮に心が引かれることはないと信じたいが、女三の宮の元へ行く源氏に、自分への愛情が薄れてしまっているのではないかと心配している心情。

【理由】光源氏が安心できる相手ではないと分かったと感じている場面があるため。

〇長年連れ添ってきたので安心していたのに、光源氏に今になって裏切られたような気持ち。表では平静を装いたいが気になってしまう。独りの時はとても寂しい。

【理由】表では心配するそぶりは見せないが、内心気にしていて夜も寝ないでいるため。

〇女三の宮は身分も高く色々な人の支えがあったが、紫の上は光源氏しかいなかった。光源氏が女三の宮の幼さに失望し紫の上の良さに気づいたが今さらなんだというような気持ち。しかし、光源氏を愛しているので辛い心境。

【理由】光源氏の愛が紫の上にとって救いだったから。

〇唯一の存在である光源氏からも世間からも良く見られなければならないので、どのような状態であっても気を抜くことができない。光源氏の他の女性からの手紙など苦労しているが、平気な顔をしないといけない。至らない部分は取り繕わなければならない。

【理由】どの場面でも、光源氏から見て魅力的であるにも関わらず、謙虚に振るまっているから。

☆「光源氏」の心情とそのように考える理由

〇女三の宮の立場や自分の立場を考え、女三の宮の元に行かなくてはならないが、それを理解し辛いはずなのに平気なふりをして自分を送り出そうとする紫の上の様子を見て、後ろ髪を引かれる思いでいる。

【理由】紫の上と離れて、女三の宮の所へ向かう場面。

〇女三の宮に対しては、最初は断っていたがその気になってしまった。紫の上に対しては、女三の宮の所に行く自分のお世話をしている姿を見てますます好きになった。輿入れの際には紫の上が気掛かりで、夢にまで見るほど想っているため会いに行く。いじらしさなどが愛しくてたまらない。

【理由】女三の宮が藤壺の姪であった点に惹かれた。

〇紫の上に悪いと思いつつ、分かってくれると思っている。

【理由】自分の愛は紫の上に届いており、彼女なら理解してくれるだろうと信頼しているから。

〇三日間のうち一晩でも次の朝でも会えないことが気がかりで、女三の宮と過ごしていながらも紫の上のことが恋しい。

【理由】女三の宮は実際可愛らしく放っておけない様な女性であるが、紫の上と比べるとまだ子どもっぽく、紫の上ほど立派ではないと思っているから。

〇紫の上は幼い頃から聡明であったが、女三の宮は可愛らしいが頼りない。

【理由】婚儀の夜の返歌で、無常の世の中でも愛が無くなることはないと言っているから。

〇兄からの頼みを断ることもできず、かといって女三の宮の幼稚さを我慢してつきあうこともできない。その上で紫の上との時間も減ってしまい、どうにもならない心情。

【理由】自分から女の元へ通っていた時と違い、女三の宮への思いが薄いような表現が多く、紫の上への思いが書いてあったため。

☆「紫の上」の心情

・自分の立場や女三の宮のことでとても悩んでいる。光源氏は、私が気づいていないだけで私は幸福なのだと言うが、生きる支えになるほどに悩み憂いている。はっきり出家を願い出たいが、その後を考えると言いづらい。苦悩を察してもらえず、うまく説明ができない。悲しく、苦しい。

・若い女三の宮に比べて自分は年をとっていて、また自分は光源氏しか頼ることができない。その彼の愛情が自分に向けられなくなってしまったらと思うと怖

い。だからこそ、今出家してしまいたいと思うが、光源氏は許してくれないだろう、などと考えることが今の私の生きる支えとなっている
・兄のように接していた者が結婚相手になることから始まり、現在の光源氏があまり来ないことまで、全て苦悩と隣り合わせの人生だった。そしてそれは光源氏への愛と同じくらい、私の中で大きなものである。それならばいっそのこと、出家した方が良いのではないか。
・源氏の妻として生きることで幸せを得ていたが、同時に苦悩も多かった。言葉に出来ない苦悩は辛く苦しいものだが、それは源氏によるもので、生きる支えでもあり、我慢せざるをえなかった。長く苦悩は続き、苦しい。この苦しさから脱出したい。
・光源氏との関係は特殊なもので、社会的保障が何もない。内心では自分の味方などいないと半ば諦めている。出家したいと思っているものの光源氏が許すはずもなく、光源氏のこと、力を失った自分のことを考えて生活することが自分の人生であると考えている。
・あなた（光源氏）に私の苦悩なんて分かるはずもないでしょうに、よくもまあそんな幸せだと言い切れるものだ。確かに小さな頃から裕福な暮らしをして教養もたくさん身に付けて、立派な女性になれたかもしれない。が、その分あなたにたくさん振り回されてきて、他の人とは違った苦悩がたくさんあったので、そんな幸せだと言い切られては黙っていられない。
・源氏との考え方の違いを理解して、互いの心の距離が離れていることを察し、悲しんでいる。
☆「光源氏」の心情
・人とは違って他に例がないほどの栄華だったが、人並以上に憂愁や悲哀の多い人生だった。しかし、憂愁ゆえに長く生きられたと考えている。紫の上は親元に暮らしているようなもので、私の愛情も増しているから幸福だ。苦悩はさほど無いだろう。
・普通の人と違う評価で普通の生活はしてこなかったが、誰も経験したことがないような悲しみも経験してきた。
・最高の位に就いているが、苦痛なことも多くあり、苦悩している。さらに柏木と女三の宮の密通により満身創痍である。
・特別な立場で生きることの苦悩。誰にも理解されない苦悩を抱える孤独。
・私のあなたに対する愛の深さをまだまだ感じてほしい。

・自分と一緒にいられたことは幸せだったはずなのに、なぜ私の手から離れようとするのだろうか。
・私なんかよりも紫の上はずっと幸せだと思う。だから、紫の上がなんで悩むのかが分からない。出家なんてもっての外だと感じている。
・自分は今の地位に上りつめるまで、たくさんの苦労をしてきた。須磨に流されようともそこから自力で這い上がってきた。それに比べて紫の上は、幼い頃から常に恵まれた環境で育ち、正妻格にまでなれているのだから、さぞかし幸せで苦悩など無かったことだろう。
・不安を抱える紫の上の気持ちを理解しておらず、心がすれ違う。柏木と女三の宮との密通を知り、嫌気がさす。
・誰も信じきれず、自分の罪も理解して、自分の保護の元生活してきた紫の上に対して執着が見える。自分の女性関係に対してまいっているような印象。（年をとったということ）
・私の過去の罪がこうして巡ってきた。亡き父も今の私のように複雑な思いと葛藤があったのだろうか。（罪の重さを身をもって知る）今後私は薫とどう向き合えば良いか。
☆「女三の宮」の心情
・光源氏に知られてしまい、どうすればいいか分からない。ショック、恐れ多い。どう顔を合わせていいか分からない。
・怖い。何と非難されるだろうか。
・もう終わった。私の人生は。
・柏木との密通の時はこれほどのことになるとは、思ってもみなかった。もう自分ではどうすれば良いか、何も考えられない。
・密通により身ごもり、現実を受け入れられない、正気ではない心持ち。源氏に顔向けできないという思いもある。
・自分をいつも大切にしてくれている光源氏に柏木との手紙を見られ、こんな形で裏切ってしまい申し訳ない。しかし、言い訳することもできないし、ただ泣くことしかできない。
☆「柏木」の心情
・光源氏に知られ、気が気でない。とても顔が見られない。恐ろしく恐れ多い。重い罪を犯したような、一生を無駄にしたような気がする。自分を気にかけてくださった方に身の程知らずのことをしてしまった。女三の宮は逢ってみると、落ち着いた心の深さというも

のがない方だった。
・光源氏の威光への恐怖。
・ばれないように密通を重ねていたが、ついにばれて身の終わりを理解した。光源氏を大きな断罪者と思い、恐れを抱く。権力者を恐怖の対象と見ている。
・密通がばれてしまい、今後の自分と源氏の関係がどうなるのか、不安。
・とんでもないことをしてしまった。空が恐ろしい。光源氏の目つきも恐ろしい。全てを見透かしているようだ。父上にも妻にも申し訳ないことをしてしまった。もう取り返しがつかない。どうしたら良いのか。生きている心地がしない。
・まさか光源氏にばれてしまうとは思ってもいなかった。募る思いを抑えることができなかった。それほどまでに女三の宮に好意を寄せていたが、自分のした行動で全てを台無しにしてしまった。自分のことを面倒見てくれていた光源氏も裏切ってしまったし、もう出世の道は閉ざされてしまった。自分はもう何も為すすべがないみっともない人間だ。
・光源氏に知られるとは思わなかった。実際に見られたわけではないのに、どこで何をしていても見られているのではないかという不安と恐怖。こんな思いの中、お酒を飲んでも楽しくないし、とても辛い。女三の宮に手を出した罰が下ったのではないかと苦しんでいる。
・元々密通を繰り返したらいつかは分かってしまうのではないかと心配していた矢先に、手紙を見つけられたことを知ったので、空（神？仏？天？）に全て見破られていたのかと思った。身のほど知らずの奴と思われたくない。同時に全く参上しないとまた怪しまれてしまう。常に気が抜けない。罪の意識がより一層極まっていくばかり。
・罪の意識。女三の宮との関係が知られ、光源氏に申し訳ないと思っている。身の程知らずだと思われてしまう。
・光源氏を神のように恐れているので、その人を裏切ってしまったことから死を感じている。女三の宮に対しては純愛の感情を抱いている。

Q.1　柏木の（女三の宮に求める）「あはれ」とは？
・かわいそうと一言だけでも声をかけてほしい。かわいそうだと共感してほしい。そうすれば心は静まる。
・身分も違い、神と思っている人の妻である女三の宮に恋をし、一線を越えてしまった自分を罪を犯した「悪いやつ」ではなく、望んでいないのにそうなってしまった「かわいそうな人」だと言ってほしい。
・女三の宮との関係を悪とするのみでは無く彼女への想いが本物だったことを認め同情してほしい。
・自身が愛した女三の宮に同情してほしい、同じ心情をもってほしいと思ったのではないか。この同情は、柏木と女三の宮の身分・性分の違いから、柏木を理解してくれるということとイコールだと思う。
・密通を行った者同士、自分だけではなく女三の宮にも自分の気持ちを理解してほしい。
・自分はこんなにも女三の宮のことを想っているのだから、せめてこの想いに対する反応、たとえそれが自分の望む感情でなかったとしても、哀れむ気持ちだけでもほしい。
・柏木は女三の宮本人を見ているのではなく、自己と周囲の環境の中で自分自身に陶酔している所があるように思える。その上で求める「あはれ」は、自己の承認と許し・赦しの意味があるのではないだろうか。

Q.2　「柏木の光源氏の視線への畏怖」というのは、どのような思いか？
・負い目。恐怖。
・女三の宮との密通に対し後ろめたさや後悔を感じているため、光源氏の普通の視線ですら怖く感じてしまうのだろう。さらに光源氏に知られてしまっているため、直接的な言い方ではなく、遠回しに嫌味を言う姿が恐ろしさを倍増させている。
・天下に並ぶ者がいない光源氏の怒りをかってしまい、彼を敵に回してしまったら生きていけないという思い。
・全てを知っていても何もしてこない様子から、何を考えているのかが分からない…。神のように貴い人だから、自分には天罰が下るだろう。早くこの目から逃れたい。
・断罪への畏怖。源氏を通してより高次な断罪者の視線を感じ、自らの破滅の確実さに恐怖している。
・神にも見える源氏の目は運命を操っているようで、罪のある柏木にとっては恐ろしいものであるという思い。
・許されないことをしてしまったことへの顔を上げられないほどの恐ろしいという思い。幼い頃から光源氏には可愛がってもらったにも関わらず、その妻と関係をもってしまったことへのいたたまれなさ。
・光源氏は帝や神のような存在で、そのような人に今の自分の姿を見せられない。自分のしたこと（光源氏

への裏切り）と光源氏への思いが交錯している。
・「神」「帝」に等しい存在だったと言っていることから、そういう存在からの目線が怖く、取り返しのつかないことをしてしまった罪のような重さを感じている。
・源氏の視線を「神からの目」というように感じている。それほど源氏という存在が大きくなり、その幻像に圧迫されることに恐怖を感じている。
・光源氏の執念。自分が死んでしまったような思い。

Q.3　光源氏の（自身の過去と対比させた）思いとは？
・自身の過去とつながる点から、負い目や懐疑心を持ちながらも自らを哀れんでいる。
・若い頃の禁断の恋が自分に返ってきた。正妻の密通した子を育てることになるのは、裏切られたようで怒りを覚えるが、同じことをした自分としては責めるに責めきれない。
・自分が昔してきた罪悪の報いをこのような形で受けることになってしまった。因果応報であるから柏木を責めることはできない。
・自分の罪がこうして巡ってきてしまった。父上も見て見ぬふりをしていたのだろうか。もしそうなら、今さらながらそのお気持ちが分かった。次は自分が見て見ぬふりをする番なのだろうか。
・自分自身も同じようなことをしたことに対する恥ずかしい思い。
・苦悩の日々を過ごし、苦しみを感じ続けてきた。罪の意識も感じていたのではないか。
・自分は部下に妻をとられてしまったが、息子に妻をとられた桐壺帝はどんな気持ちだったのだろうか。同時に、やはり柏木を簡単に許したり知らないふりをしたりすることはできない。
・自身の過去も恐ろしかったと思っている。→報いを受けたから死後の罪は軽くしてほしい。
・女三の宮の裏切りや若い頃の間違いを含め、苦しい思いを多くしてきた。その分来世では罪が軽くなっているだろう。
・女三の宮をずっと大切にしてきたが、裏切られてしまって幻滅している。

Q.1　紫の上の「ものあはれ」「あはれなり」とは、誰（何）に対するどのような気持ちか？
・光源氏を思いつつも、長くない自分の命のはかなさも感じている。
・悲しませたくないと思っているのに、自分が死んだら…と悲しくなってしまう行き場のないような気持ち。
・光源氏に対しての「おいたわしいや」という悲しい気持ち。
・自分の死よりも、独りになってしまう光源氏のことが心配だ。
・自身の身を理解し、源氏に思いを馳せ、「源氏が悲しむ」ことを悲しんでいる。
・光源氏を悲しませたくない。失望させたくない。

Q.2　紫の上の辞世の和歌に表れた思いは？
・露はすぐに消えてしまうように、自分もはかなく消えてしまうのでしょう。
・萩の上の露のように、もう私の命は長くありません。
・自分の死期を悟る。命の短さ（儚さ）を露と重ねる。

Q.3　光源氏の返歌に表れた思いは？
・露のようにはかない世ですので、せめてあなたと一緒にいたいです。そして、死ぬ時も一緒がいいですね。
・紫の上に対する並々ならぬ執着。
・紫の上といつまでも一緒にいたい。
・紫の上がいなくなったことを考え、そんな世こそ露のように儚いと考え、紫の上への強い思い（愛情）を感じる。

Q.4　紫の上の人物像とそのように考える理由
〇容姿は美しく純粋に源氏を想っている人。子どもが生まれなかったことや女三の宮の降嫁等悩まされることが多くあっても、源氏に想われ続けた人。
〇控えめであるが、人を惹きつける魅力のある女性。思いやりがあり、時には自分を抑圧してでも相手を思って行動する。反面、心情では様々な思いを抱え、人間味がある。
【理由】授業の最初の方で、紫の上の表現などに触れ、思慮深く、控えめな印象をもったから。また、自分の心情を表には出さず、相手を思った言動が多く見られたから。その上で、心の内では、人間味のある心情が読み取れたから。
〇光源氏に育てられただけあって、光源氏のためのオーダーメイドのような女性。当時の美の基準とされているものは全て満たし、それでいて才能にも溢れ、目立つことなく穏やかで、光源氏を支えたすばらしい女性。
【理由】自分の子ではない子を育てさせられたり、い

きなり自分より格上の若い正妻が嫁いできたり、かと思えば「俺と結婚できて幸せだろ」とないがしろにされたりと、波瀾万丈とも言える出来事の中で、それらを感じさせないような振る舞いをしていたから。
○美しく可愛らしい理想的な女性。苦悩も多いが、美しく悟りを開き、最後まで美しい女性。
【理由】光源氏から紫の上と一緒に生涯を終えたいと言われたから。
○最期までその美しさが際立つ女性。また、たくさんの女性と関わってきた光源氏にとっても最大限の愛情が注がれている存在。見えないところで少しずつむしばまれている。（心、精神、体）そこからの出家の願いか。
【理由】御法巻での最期の描写などから美的な印象を受け、また人生の中で悲しみや苦しみが積もっていく印象を感じたから。
○身体性において抜きん出ている人物。ある意味で源氏のことを高みから慈しんで眺めるように存在している人物。光源氏に愛されていることを自覚している人物。
【理由】御法巻の紫の上の肉体は、たとえ痩せ細っていても可愛く美しく、老いや死からは遠ざけられているから。自分が先に死んでしまった場合、残された光源氏がいかに悲嘆するかをしみじみと感じているから。
○内に秘めている思いを最後まで貫こうとする強い女性。
【理由】心の中では思ったり考えたりすることはできても、不安や悩みを声に出して言っている印象が無いから。
○幼少期から晩年まで常に光源氏に尽くし愛し続けた人物。その分「源氏の愛」が存在意義になっていたところもあるのではないか。
○常に寂しく、心の中は孤独な人。
【理由】小さい時に光源氏の目にとまり、大事に育てられてきた。が、紫の上にとって頼りは源氏だけであり、大事に育てられたという環境や光源氏の女性関係が紫の上を孤独にしているから。

Q.5　光源氏の人物像とそのように考える理由
○華やかな女性関係を築き、多くの女性をとりこにするような、かっこよく何でもできてしまう人物。女性関係だけでなく、仕事もぬかりなくこなし、何事にも熱心で愛情深い。
【理由】様々な女性と関係をもち、その都度しっかりと愛情を注いでいるから。また、身分にふさわしい仕事、働きもしているから。
○たくさんの女性との関わりの中で、苦悩や葛藤をたくさん抱えてきた。様々な感情が湧き上がってくる中でも、一人の男として、言動が理路整然としている印象。良い意味でも悪い意味でも「人間」という印象。
【理由】各巻を通して、愛した女性との関わりがピックアップされてきたが、毎回そこに人間味のある感情の交錯ややり取りが見られたから。
○この世の誰よりも美しく格好が良い。マザコン。プレイボーイ。完璧男子。情に厚い。傲慢。冷徹。自分を棚に上げる。
【理由】桐壺更衣から藤壺という執着が大きいから。関係をもった女性がとても多いため。音楽・絵画・書道など全てに精通しているため。兄朱雀帝をこけにしたことがあるから。自分を裏切った者には報復を施しているから。
○紫の上への執着が強い。美しい物、人への関心が深く、また、それに対する執着もある。
【理由】終始、人に限らず、美しい物に対して真正面から向き合っていたから。
○プレイボーイではあるが、愛した女性を大切にする人。顔がかっこいいというだけでなく、女性に好かれる発言や行動ができる良き男性。
【理由】色々な女性に手を出すが、愛妻他女性が病気になった時や思い悩んだ時は寄り添い続けていたから。
○才能にあふれ、誰もその地点に辿り着けないほど別格な人だが、自分のことが一番大切で、周りをも巻き込んで振り回してしまう台風の目のような人物。
【理由】藤壺との密通から始まり、全てが因果応報のように、光源氏やその周りの人物にまで災難が降りかかってきていると感じたから。
○紫の上を自分の心の支えとしてしまったから、自分から離れることが許せない。今までの経験から、紫の上以外の女性を信じることが出来ない。最初は女性を手玉にとるようなプレイボーイに感じたのに、後半はそんな風に見えなくなる。（執着心が強い）
【理由】紫の上を追い詰めるような描写。文中から紫の上に対する執着。
○晩年を迎えてから（＊第二部）は絶対的な存在ではなくなっている。多くの女性に気を引かれてしまう浮気性な人物から、一人の女性に気持ちを持ち続ける一

途な人物への変化していった。
【理由】紫の上に先立たれることを極端に恐れているから。これまでたくさんの女性を虜にしては関係をもってきた光源氏が、紫の上にだけはこれまでに見せたことのない気持ちを露わにしているから。
○絶頂期の光と、その後の業の部分まで描かれた人物。多くの女性と関わってきたが、その心中の大部分を占めるのは紫の上であったのではないか。
○恋多き人。何人もの女性の人生を狂わせた、はまるとダメな男。（現代でいうホストみたいなイメージ）
○心が満たされることなく、数々の女性と関係をもち、孤独から逃れようとした寂しい男性。
○どこか孤独。イケメン。
【理由】母の愛情を求め、無償の愛に飢えているように感じたから。
○政治という男の世界と愛や母性を求めるといった女の世界の間で苦悩する人物。
【理由】幼少の頃から母の面影を求めていたことと、何度か光源氏に訪れた政敵との関係から。

５．学生の感想・意見（授業方法について）

★予習
○予習したからこそグループで真剣に悩み意見を出すことができた。

★桐壺巻
○桐壺更衣の身分や人物などを考察するのは初めてだったので面白かった。楊貴妃と比較するなど、卒論でもこういった視点が必要なのだと分かった。
○復習のところで関係図が用いられており、振り返りやすかった。ここまで人物の言葉の裏に隠されたものを考えてなかったので、知識が増えた。

★帚木巻・空蝉巻
○空蝉の人物像をグループで話し合い、皆の意見を聞いて授業を進めていたのが参考になった。
○中流身分の人を板書する際、(1)～(4)にしてそれを色分けして頼りになる・ならないと書いているのが、区別しやすくて分かりやすかった。
○ワークシートやパワーポイントを使い、またパワーポイントは色分けがされていて、とても分かりやすかった。

★若紫巻
○最初の藤壺の寸劇に引き込まれた。それがあったからこそ、その後の話や説明が頭に入りやすかった。
○光源氏と藤壺それぞれの心情をセリフにするのは面白く、他の人のセリフも面白かった。
○セリフを考えることで、より世界観に没入できた。
○藤壺のセリフを考えることで、物語を深く読み込み人物像の理解にもつながるので、自分もこの方法を使ってみたい。
○藤壺の胸中の言葉について考えて、現実的に考えていることや密通について桐壺帝への罪の意識があるのだと分かった。

★葵巻
○DVD（アニメ『源氏物語』）を視聴することで、より源氏物語の世界が分かった。六条御息所の人物像を想像しやすくなった。

★賢木巻
○セリフ等をざっくりと考えるのが難しかった。楽しかった。
○セリフに置き換えるのが、内容理解もでき、楽しかった。

★須磨巻・明石巻・澪標巻
○紫の上と明石の君各人物像の比較をすることで、各々の違いも分かりやすく学びやすかった。

★若菜上巻
○紫の上と女三の宮の比較をすると、古語や光源氏の心情に違いが見られたのが興味深かった。
○登場人物の心情を想像することで、本文には記されていない気持ちや思いが伝わってくる気がした。

★若菜下巻
○様々な登場人物の心情を考えると、本文からだけでは分からない当時の情景が浮かんでくるような気がした。
○光源氏と紫の上、女三の宮、柏木の関係性や個人の思いを比較することができて、分かりやすく理解できた。

★柏木巻
○ワークシート（＊人物別キーワード古語、キーセンテンス古文、古語の意味一覧）が見やすかった。

６．成果と課題

《成果》

セリフ作成やざっくり現代語訳には楽しんで取り組んでいた。内容理解だけでなく一つ創造的な課題を取り入れると、学生の興味・関心は高まりその理解も広がり深めることができる。また、人物像や心情はかなり詳細な

点まで考察していた。特に、第一部と第二部での光源氏像の変化（老いや相対性）や紫の上の内面の苦悩、二人のすれ違う思いを的確に捉えた学生が多かった。

『源氏物語』の正編の全体像を捉えながら（巻ごとのあらすじを追いながら）、各人物像を理解させる（その人物が関係する巻を読む）ので、分量も多く負担に感じた学生もいた。が、「あらすじは知っていたが人物像を考えるのは初めてで面白かった」という学生の方が圧倒的に多かった。高校では 1 時間で 1 人の人物の一生を追えるように複数巻を読んだ。おそらくその方が人物像を捉えるには効果的だとは思われるが、本校の学生は毎時間熱心に取り組んでいた。

これらは、教材として本文の他に現代語訳を提示したこと、人物像に関する先行研究を提示したこと、PPT やワークシートの活用による授業のポイントの把握による効果が大きいと考える。前時の復習として皆の考えを提示したり、電子黒板を使ってその場で提示したり、皆の意見を共有して、理解を更に深め広げさせていきたい。

【課題】

(1)　学生からの質問では以下の 2 点が挙げられた。

①『源氏物語』では人間関係を理解させるのが難しいが読解の鍵だと思われるので、どうすればよいか。

授業のたびに関係図を PPT やワークシート上で提示する。関係性をはっきりさせないと心情や人物像の理解ができないので、毎時間繰り返すと自然に覚えてもらえる。

②密通という題材を高校生に対してどのように取り上げればよいのか。

『源氏物語』は高校 2,3 年生で読むので、教科書を中心とした授業をしながら、必要に応じて取り上げれば良い。今回は大学生向けの授業なのでじっくり取り組んだが、引っかかりがあるようならば無理して取り上げる必要はない。簡単な説明だけでも良い。

(2)　多様な「創作」の可能性

今回は、「セリフ作成」と「ざっくり現代語訳」であったが、和歌つぶやき翻訳、脚本作成や演劇発表、各人物が描かれた巻のアンソロジー作成等、大いに工夫して学生の創作の幅を広げていきたい。

(3)　今後の展望

今年度は、各巻において「漢籍との読み比べ」を行う予定である。小中高大で行われている他作品との読み比べを私の授業でも採り入れていきたい。

注

1　今井源衛「明石上について」『今井源衛著作集　2　源氏物語登場人物論』笠間書院　2004 年（初出「国語と国文学」26-6　1949 年 6 月）

2　「国文学　解釈と教材の研究　源氏物語の人びと―作中人物論の現在」36-5　學燈社　1991 年 5 月

3　伊井春樹「人物論研究の意義―史的展開と女三宮・柏木像をめぐって―」『源氏物語研究集成　第 5 巻　源氏物語の人物論』風間書房　2000 年

4　座談会「作中人物論の回顧と展望」（出席者原岡文子・吉海直人　司会上原作和）室伏信助監修　上原作和編集『人物で読む源氏物語　第一巻　桐壺帝・桐壺更衣』勉誠出版　2005 年